保健科学研究誌
Journal of Health Sciences No.6：15－22

熊本保健科学大学学生の喫煙実態調査

三村孝俊　嶋田かをる　多久島寛孝　與座嘉康
山鹿敏臣　高橋　徹　大川原正　田中ヨシエ

熊本保健科学大学では2010年より「敷地内全面禁煙」を実行することを決定し，目標実現のために平成20年度にプロジェクトチームが発足している。その行動支援として現在の状況を把握することが重要であると考え，学生の喫煙に対する実態調査を行なった。調査の内容は ［1］回答者の属性，［2］喫煙の状況，［3］喫煙経験と今後の禁煙意向，［4］たばこに対する態度，［5］日本看護協会の「たばこ対策」の認知と賛同意向，の5項目に大別して行なった。その結果，全学生の喫煙率は8.3％であった。また喫煙経験者のはじめての喫煙経験は10～15歳と低年齢から始まっているが大学に入学してからも喫煙を始める機会があり，大学での友人や周囲の影響が大きいことが判明した。彼らは喫煙行動の理由として緊張の緩和や気分転換をあげており，さらに酒席の機会も喫煙行動を促している。一方，喫煙者の禁煙に関する関心は低くない。禁煙の理由として「健康」，「たばこ代」そして「医療従事者としての自覚」がある。喫煙による健康被害として呼吸器や循環器疾患については認知されていた。そして，「たばこ」について知りたい情報としては「受動喫煙による疾病」と「禁煙したい人への支援組織」が多かった。なお，非喫煙者に「喫煙問題に対する対策について関心がない」という者が少なからずおり，禁煙プロジェクトチームとしては無関心層の啓蒙，具体的な禁煙支援の情報を伝えていかなければならない。

キーワード：喫煙，喫煙経験，禁煙，禁煙プロジェクト

Ⅰ．緒　言

喫煙の有害性が次々と明らかになってきた今日，社会全体が脱タバコに向けて動き出し，医療機関はもとより多くの大学が敷地内全面禁煙を達成，もしくは達成に向けて動き出している。保健医療を担う人材を育成する熊本保健科学大学（以下「本学」）が，最大の健康リスクである喫煙対策に取り組み，敷地内全面禁煙化をめざす事は当然である。そして，ただ単に喫煙者だけの問題としてではなく，脱タバコ社会に向けてリーダーシップを発揮できる人材を育成しなければならない。

本学では，平成19年度末大学運営協議会において2010年4月1日より敷地内全面禁煙を実施する事が決定された。そして，運営協議会決定の実現に向けて，全学の取り組みを推進することを目的として，平成20年度に禁煙プロジェクトチーム（以下「PT」）が編成された。

平成20年3月現在，本学における喫煙はキャンパス内に4箇所の「喫煙所」が指定されており，それ以外は敷地内では喫煙はできず，さらに段階的に喫煙所を削減して敷地内全面禁煙へ移行することになっている。しかし，上述決定は，単に強権的に実行すれば済むというものではなく，喫煙者の禁煙サポート等の支援策および喫煙問題の啓蒙が必要である。PTのキックオフミーティングにおいてはその目標遂行に種々のプログラムが挙げられた。今回，著者らはPTの活動支援として本学の「たばこに関する意識等の実態」を知ることが具体的な行動目標につながると考え，本学学生を対象としてアンケート調査を行った。

Ⅱ．研究方法

2005年に熊本県看護協会より「熊本県看護学生とたばこ実態調査報告書」が発表されている。今回，調査を行なうにあたり，協会のデータとの比較を念頭において，アンケートをそのまま使用した。アン

ケートの内容に従い，調査内容は〔1〕回答者の属性，〔2〕喫煙の状況，〔3〕喫煙経験と今後の禁煙意向，〔4〕たばこに対する態度，〔5〕日本看護協会の「たばこ対策」の認知と意向に大別し実施した。

アンケートは，平成20年の4月から8月にかけて実施し，各学科学年別に収集した。アンケートを学生に依頼するにあたっては，調査の目的，無記名回答，そして回答は任意であることを説明した。また，今回の調査については，あらかじめ本学倫理審査委員会の許可を得て行なった。収集したアンケート回答用紙は，OCR で読み込んだものをデータファイルとして Microsoft　Excel® で分析を行なった。図中に示した回答数者数（N）は欠損値があるため総計数にばらつきがある。

Ⅲ．結　　果

〔1〕回答者の属性

表1の対象者属性にまとめたように，年齢層では，全体として20歳未満が若干多くなっている。性別では，男1に対し女2.4の比率である。なお，今回，学部全体のうち一部（看護1，3年分）が未収集の状態であるため，全学部1,000人強に対し770人分のデータ分析となった。

回答者が在籍する学科の内訳は，衛生技術学科52.7%，看護学科26.1%，リハビリテーション学科21.2%の割合であった。

大学において何らかの禁煙・分煙対策がとられているかどうかについて，回答者全体では81.8%が「とられている」と回答し，5.7%が「特にとられていない」，12.5%が「わからない」と回答した。

同居家族に喫煙者がいるかについて，同居家族に喫煙者が「いない」は全体の48.4%で，「いる」は29.8%となった。

喫煙経験は全体の83.1%が「ない」と答えている。「ある」と回答した者16.0%の内訳を年齢層別で調べた結果，20歳未満では女性5.1%，男性29.0%であり，20歳以上では女性12.3%，男性42.4%を示した。男女を合わせると，喫煙経験は20歳未満12.1%，20歳以上は21.0%である。さらに分析してみると，喫煙経験のある者に対して現在の喫煙状況は喫煙経験者のうち，「毎日吸っている」は29.4%，「時々吸う」が24.4%であり，「現在は吸っていない」が46.2%となった。さらに20歳未満と20歳以上，男女別に分析すると，「毎日吸っている」は20歳未満では女性7.1%，男性24.2%であり，20歳以上では女性19.4%，男性48.8%であった。「毎日吸っている」，「時々吸っている」を合わせると，20歳未満では女性50.0%，男性48.4%であり，20歳以上では女性35.5%，男性73.2%であった。

〔2〕喫煙の状況

1　はじめて喫煙した年齢

「今までにたばこを吸ったことがある」と回答した学生に，はじめて喫煙した年齢を聞いた。最も多いのが「10～15歳」で，次に「19歳」である（図1）。

性別・年齢別に分けると，20歳未満の女性喫煙者では「10～15歳」33.3%，「19歳」33. 3%が多く，次に「16歳」20%であった。20歳未満の男性喫煙者では，「10～15歳」40%が最も多く，次に「18歳」28.6%であり，男性は18歳までに9割以上の者が喫煙を経験していた。20歳以上の喫煙者では，男女ともに「10～15歳」24.4%および27.6%が一番高い数値であるがこの年齢に集中することはなく，広い年齢層にわたっていた。そして20歳未満の低年齢から経験していた。

2　たばこを吸ったきっかけ

表1　対象者属性

学科	対象者数	年齢	男／女	大学の喫煙・分煙対策状況			同居者の喫煙状況			喫煙暦		
				とられている	とられていない	分からない	いる	いない	独居者	現喫煙者	元喫煙者	非喫煙者
衛生技術学科	402	19.7±1.4	128/274	326(81)	22(5)	54(13)	126(31)	194(48)	82 (20)	38(9)	25(6)	337(84)
看護学科	204	20.2±1.3	29/175	176(86)	12(6)	15(7)	57(28)	108(53)	38 (19)	14(7)	19(9)	166(81)
リハビリテーション学科	164	18.8±1.1	67/97	127(77)	10(6)	27(16)	46(28)	7 0(43)	48 (29)	12(7)	11(7)	137(84)
全学科	770	19.6±1.4	224/546	629(82)	44(6)	96(12)	229(30)	372(48)	168 (22)	64(8)	55(7)	640(83)

＊（）内は対象者数に対する比率を示す

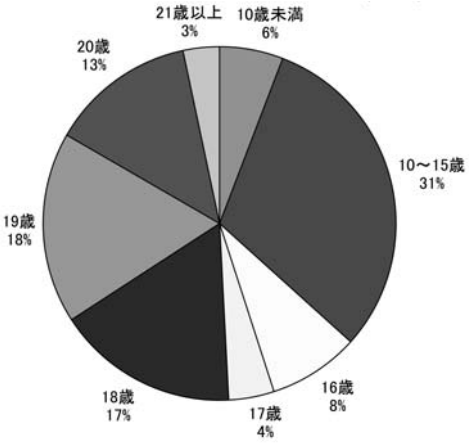

図１　はじめてたばこを吸った年齢

（N ＝120）

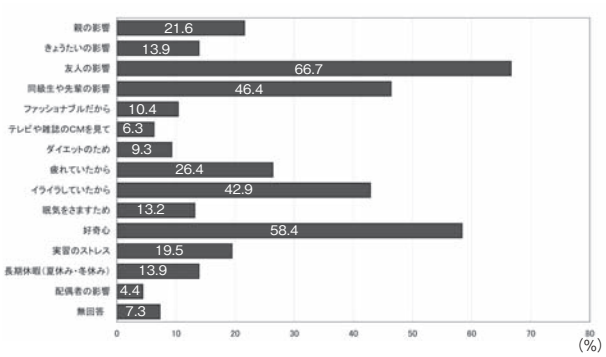

図２　たばこを吸ったきっかけ

（複数回答　N ＝124）

喫煙者に対し，たばこを吸ったきっかけを調べた。「友人の影響」，「好奇心」，「同級生や先輩の影響」の順で多かった（図２）。

３　喫煙行動

（１）どんなときにたばこを吸いたくなるか

喫煙者を対象に，選択の割合を調べると「イライラしたときに喫煙する」および「気分転換したいとき」，「お酒を飲んだとき」，「食後」，「憂鬱や不安を忘れたいとき」，「くつろいでいるとき」の順に多かった（図３）。

（２）起床後最初の喫煙までの時間

「起床後どれくらい経って喫煙するか」を聞いた。喫煙者全体で「起床後５分以内」に最初のたばこを吸うのは12.5％であり，「１時間以内までに吸う」は37.5％であった（図４）。

「毎日吸っている」と回答されたデータで分析すると「５分以内」が22.9％，「１時間以内までに吸う」は62.9％であった。同様に「時々吸う」では「５分以内」が０％，「１時間以内までに吸う」は6.9％であった。ただし，「時々吸う」への回答では無回答（欠損値）が多く参考データとしたい。

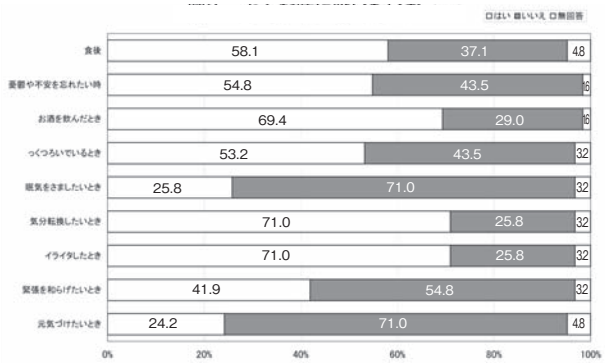

図３　どんな時に吸いたいか

（N ＝62）

図４　現在の喫煙状況（喫煙者）

（３）喫煙せずに１日を過ごすことは難しいか

たばこを全く吸わずに一日を過ごすことは難しいかについては（図５）のとおりである。「毎日吸っている」者だけで分析すると「とても難しい」，「難しい」を合わせると74.2％と高値である。しかし，

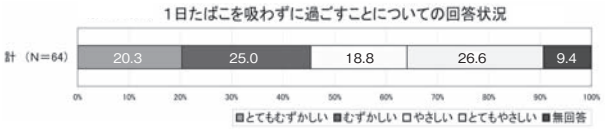

図５　現在の喫煙状況（喫煙者）

「時々吸う」者については「とても難しい」０％，「難しい」10.3％と低値である。

（４）１日の喫煙本数

１日の喫煙本数を調べると，喫煙者全体では，「１～10本」が75.8％で一番多く，「11～20本」22.6％，「21～30本」1.6％という順となった。平均は，一日あたり8.8本であった。

（５）喫煙する場所

たばこを吸う場所について選択肢から複数で回答を求めた。

「大学所定の喫煙場所」が最も多く，次いで「自宅の屋外」，「自宅の居室」であった（図６）。本学では現在「指定場所以外喫煙禁止」となっている。

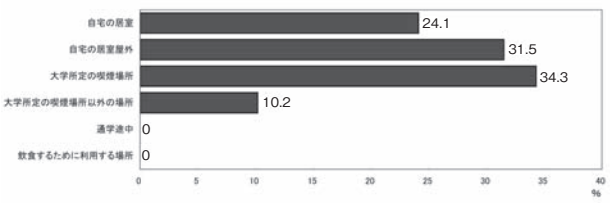

図６　たばこを吸う場所
（複数回答　N ＝108）

〔３〕禁煙経験と今後の禁煙意向

１　禁煙の経験

（１）過去の禁煙経験

今までに喫煙経験がある者について禁煙の試みについて質問した。

「禁煙に成功した」および「禁煙中」が半数であるが，「禁煙を試みたが成功しなかった」，「禁煙を考えた事はあるがしなかった」，「禁煙を考えたことはない」で成功しなかった者も半数近くいた（図７）。

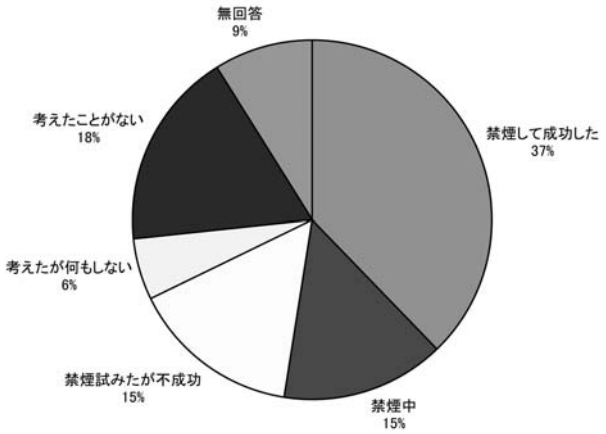

図７　今までに禁煙しようとしたことがあるか
（N ＝124）

「毎日吸っている」に限定して図７の項目を分析すると，42.9%は「禁煙の試みを行ったが成功していない」と答えていた。また，「一度禁煙に成功しながら再度喫煙し始めた」が男子7.1%，女子14.3%であった。

同様に「時々吸う」では，「禁煙を試みたが成功しなかった」は13.8%，「禁煙を考えたことはない」27.6%であり，「毎日吸っている」と回答した学生より禁煙に関する関心が低いことを示した。

（２）禁煙を考えた理由

「禁煙をした（しようとした）」，または「禁煙を考えた事がある」と回答した学生に，禁煙を考えた理由を複数回答で求めた。

「健康に悪い」が最も多く，続いて「たばこ代がかかる」，「他人に迷惑がかかる」，「やめられなくなりそう」，「自分自身が医療保健者となるため」，「家族や友人の勧め」の順を示した（図８）。

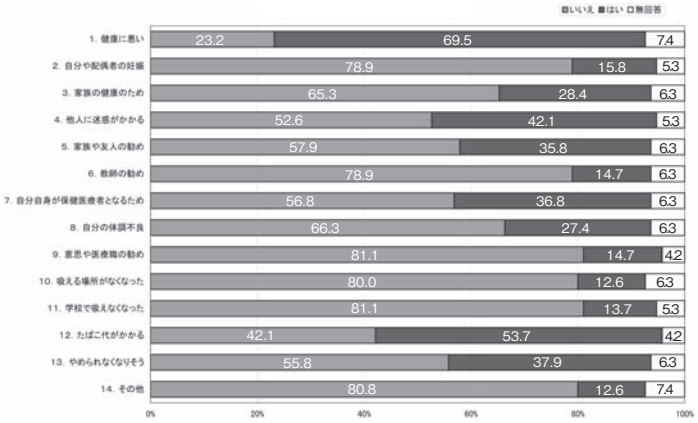

図８　禁煙を考えた理由
（N ＝95）

（３）禁煙への興味

喫煙者に対して，「禁煙に興味があるか」に対して回答を求めた。「禁煙に興味がない」との回答は全体で14.5%，「関心がありすぐにでもしたい」との回答も12.1%と低かった。20歳未満と20歳以上の比較では，禁煙への興味に大きな差は見られなかった。

〔４〕喫煙に対する態度

１　喫煙の健康への影響に関する知識

（１）能動喫煙の健康への影響に関する知識

たばこを吸うことで影響を及ぼすと思う病気を挙げて複数可で選択してもらい能動喫煙の健康への影響に関する知識を調べた。選択率が高いのは，「肺がん」，「妊娠への影響（胎児への影響）」，「肺気腫」であった　（図９）。

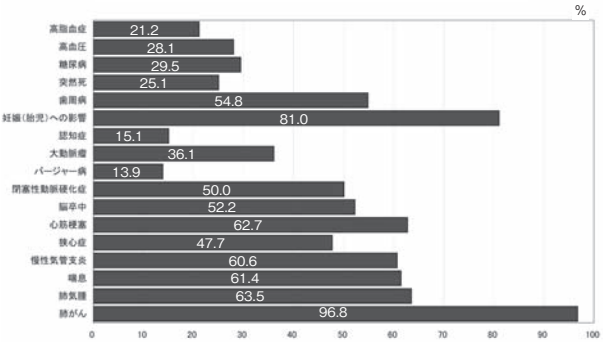

図９　たばこを吸うことで影響を及ぼすと思う病気
（複数回答　N ＝770）

（２）受動喫煙の健康への影響に関する知識

受動喫煙が影響を及ぼすと思う病気を挙げて複数回答可で選択してもらい，受動喫煙の健康への影響に関する知識を調べた。選択率が高いのは「肺がん」,「妊娠への影響（胎児への影響）」,「子どもの喘息」であった。上位に関しては能動喫煙とほぼ同じ内容となった（図10）。

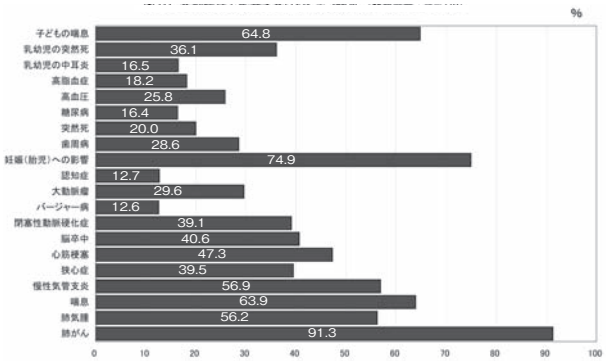

図10　受動喫煙で影響を受けると思う病気
（複数回答　N ＝770）

２　喫煙に対する態度

喫煙の有無に関係なく喫煙により胎児や子どもあるいは自分の健康に何らかの影響があると90％近くの学生が指摘している。「女性の喫煙は好ましくない」については83.8％が,「時と場所を選べば個人の自由」では，79.9％が肯定している。「保健医療従事者の喫煙」に関しては，82.2％が好ましくないと答えている　（図11）。

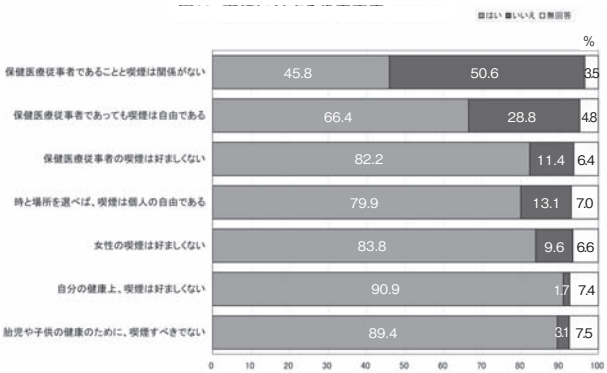

図11　喫煙に対する肯定否定
（N ＝770）

３　喫煙について知っている情報・喫煙についての知りたい情報（複数回答可）

知っている情報は「喫煙習慣がニコチン依存症である事」が684人で最も多く，ついで「受動喫煙でかかりやすくなる疾病」が518人,「能動喫煙でかかりやすくなる疾病」が509人であった。（図12）。喫煙について知りたい情報については,「受動喫煙でかかりやすくなる疾病」が最も多く307人で，ついで「効果的な禁煙プログラムについて」221人,「禁煙したい人への支援組織」が173人であった（図12）。

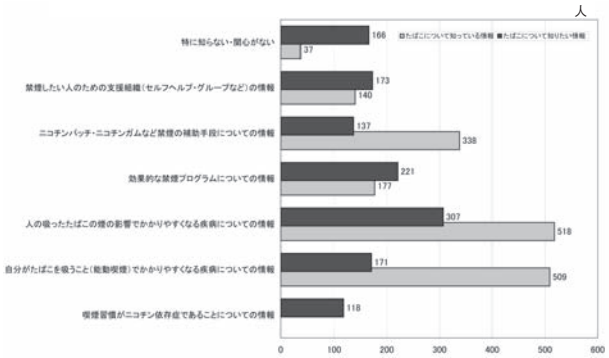

図12　たばこについて知りたい情報および知っている情報
（N ＝770）

４　過去にたばこ（喫煙）の教育を受けたことはあるか

過去にたばこの害についての教育，情報については，殆ど（94％）の者が何らかの教育を受けていた。

〔５〕日本看護協会の「たばこ対策」の認知と賛同意向

看護学科のみの質問事項である。

日本看護協会の「たばこ対策の取り組み」を知っているは28％，知らなかったは72％であった。日本看護協会の「たばこ対策」の取り組みについて，全体の64.3％が「賛同し協力したい」と回答している。

Ⅳ．考　　察

熊本保健科学大学の学生の喫煙に関する実態調査を行い，次の項目について分析考察した。

１　喫煙の状況

喫煙率喫の定義を，看護協会の「全回答者に対する喫煙者［毎日吸っている］,［時々吸っている］の合計が占める比率」に従うと今回の調査における喫煙率は64人，8.3％となった。

はじめて喫煙した年齢は「10～15歳」が最も多く，興味本位もあるだろうが現在も常習的なものかは不明である。次に多いのが男性では「18歳」，女性では「19歳」であり，法的には未成年で吸える年齢で

はないが大学に入ってから（中には予備校等）経験したことになる。たばこを吸ったきっかけは「友人の影響」,「好奇心」,「同級生や先輩の影響」という結果から大学生活環境に大きく影響を受けていることを示した。そして喫煙が低年齢層から開始されており，特に本学在学中に喫煙開始の機会にならないよう学生への禁煙の働きかけや情報提供が重要である。「敷地内全面禁煙」の実行およびそれに至る継続的な啓蒙による環境の変化が禁煙への第一歩になるのではないかと期待している。同居家族に喫煙者が「いる」は全体の29.8％であるが，一人暮らしの学生が実家に帰れば同じ割合で家族の喫煙者が増えることが考えられる。厚生労働省の公表データによると成人喫煙率は平成18年の調査では，喫煙率は23.8％で，年々減少してきているが，男性の喫煙率は39.9％で，30歳代が最も高く53.3％である。

一方，女性の喫煙率は10.0％で，20歳代が17.9％，30歳代が16.4％と若年層で高い値を示している。身近にたばこがある環境の影響を除くうえでも（親）社会人への禁煙指導も必要である。

喫煙行動の引き金は，緊張の緩和，気分転換など，そして酒席ではアルコールが入ることにより自制心が緩み，周囲も喫煙を認めやすい状況になると考えられる。また，大学内では吸えなくても学外に出れば喫煙を容認される環境にある。特に大学関係のクラブ・サークルのような団体では，打ち上げなど酒席の機会があるので頻繁に禁煙指導を行なうことも重要と考えられる。

本学の禁煙・分煙対策の周知に関しては殆どの学生（82％）が認識しており，禁煙及び受動喫煙防止の取り組みは着実に浸透していることがうかがわれた。しかし，わずかではあるが対策を知らないという学生も存在する（12％）。PT では広報の手段として，現在は分煙ポスターの掲示等を行なっているが，さらに徹底せねばならない。喫煙しない学生は「喫煙問題」に無関心の者もいると思われるが，これから社会でのオピニオンリーダーとして関心を持ってもらいたいと思う。

2　禁煙経験と今後の禁煙意向

今までに喫煙経験がある者について禁煙に対する関心は高い。その反面，禁煙に成功しても再度喫煙している者がいることから，禁煙の困難さが窺われた。

禁煙の理由として,「健康」,「たばこ代」,「他人に迷惑がかかる」,「やめられなくなりそう」,「自分自身が保健医療者となるため」と続いた。学生の本分は勉学にあり,「たばこ代」に経費をさくのは問題である。学生の経済力を考えると最近言われている「たばこ代の値上げ」が禁煙に効果的であるかもしれない。

喫煙者の禁煙に対する意向を尋ねたところ，20歳未満における割合が高く，禁煙に向けた働きかけ次第では，早期の禁煙開始へとつながる可能性がある。特に「関心がありすぐにでもしたい」との回答は12.1％と低かったが，この群が禁煙に向けた働きかけに対し，最も効果が期待される対象であると考えられる。

3　喫煙に対する態度

能動喫煙，受動喫煙の健康への影響に関する知識を尋ねたところ，呼吸器や循環器疾患などについては６～９割が知っているが，バージャー病，認知症，糖尿病などの知識は少なかった。本学の教育のなかで喫煙と疾患の関連を強調する工夫が必要と思われる。

本調査より，喫煙は自分自身や子供及び胎児に対して健康上問題があることは認識されている。しかし,「時と場所を選べば」,「保健医療従事者であっても」喫煙は自由であると79.9％の学生が考えている。喫煙の問題がマナーだけの問題ではないことを認識させる必要があると思われた。喫煙・たばこについて知りたい情報については,「受動喫煙の影響」および「禁煙支援」が多かったが，関心がない者もいた。PT としてはこの点についても無関心層の啓蒙と共に，具体的な禁煙支援の情報を伝えなければならない。学生時に対策や情報を提供することで，具体的な禁煙に向けた行動を起こさせることが将来にわたる禁煙に結びつくのではないかと考える。

4　日本看護協会の「たばこ対策」の認知と賛同意向

看護学生についてだけの調査であるが,「日本看護協会の「たばこ対策」の取り組みに「賛同し，協力したい」と回答した学生は過半数を示した。反面，そうでない学生が少なからずいるが，そのような学生に対して積極的な取り組みへの参加を促していく必要がある。

Ⅴ．まとめ

今回，本学学生を対象に喫煙状況を調査した結果，喫煙率は8.3%となり，また他の項目も看護協会の結果と多くの類似性が認められた。喫煙の経験年齢は看護協会の調査と同じく10～15歳が最も高く，大学に入学してから喫煙を始める機会があること，および喫煙経験の機会は大学の身近な人的環境が大きく影響していることが本調査より示唆された。また，たばこの有害性を知っているがそのことに関する関心は薄く，喫煙と疾患の関連について充分な知識があるとは言えないことも判明した。このことから，PT 活動として，学生時代から喫煙に対する正確な知識，禁煙に関する情報の提供を行い，意識の向上を図る必要がある。また，学生を取り巻く環境へ禁煙指導のアプローチをすることにより多くの学生が，喫煙しない，あるいは禁煙できるよう，働きかける必要がある。

謝　辞

今回アンケートを行なうにあたり，「社団法人熊本県看護協会」の報告書を参考にさせて頂きました。また，調査に協力頂いた本学学生にも感謝します。

参考文献

2005年，熊本県看護学生とたばこ実態調査報告書：社団法人　熊本県看護協会

齋藤久美子ら：青森県の看護学生の喫煙行動と喫煙に対する意識。弘前大学大学院保健学研究科紀要７巻　Page45－53（2008．02）

吉田貴美代ら：喫煙看護学生の喫煙行動の実態と課題に関する検討：聖マリア学院紀要22巻　Page57－61（2008．03）

弥永和美ら：看護学生の喫煙行動とその関連要因：聖マリア学院紀要22巻　Page41－47(2008．03)

堤千代ら：看護職の喫煙状況と看護学生に対する喫煙教育のあり方：聖マリア学院紀要22巻　Page21－27（2008．03）

三村孝俊，嶋田かをる，多久島寛孝，與座嘉康，山鹿敏臣，高橋　徹，大川原正，田中ヨシエ

以上

〒861－5598　熊本市和泉町325番地
熊本保健科学大学　保健科学部

A Survey on Smoking Status of the Students in Kumamoto Health Science University

Takatoshi MIMURA, Kaoru SHIMADA, Hirotaka TAKUSHIMA,
Yoshiyasu YOZA, Toshitaka YAMAGA, Tohru TAKAHASHI,
Tadashi OKAWARA ,Yoshie TANAKA

Summary

At Kumamoto Health Science University, it was decided to prohibit all the students and the staff from smoking in the campus from 2010, and the project team was organized for that purpose. In order to promote the stop-smoking program in Kumamoto Health Science University, actual smoking trend of the students was investigated.

The research contents include : 1) responders attribute, 2) if they smoke or not, 3) their smoking experience, and if they wish to stop smoking, 4) their attitude to smoking, 5) their recognition of the stop-smoking policy of the Japan Nursing Association.

The smoking rate of the students was 8.3%, and most of the smokers began smoking during the low age period from 10 to 15 years old. Some students, however, started smoking after they had entered the university, which indicates that the smoking students were strongly influenced each other in the campus. It is slso revealed that the students smoke in order to soothe and relax themselves. At the same time, however, many smoking students are interested in quitting smoking in no small way. The reason was for their health, money saving, and consciousness of medic. The respiratory illnesses and the circulatory organs disease were recognized well as a health hazard by smoking. Many of the students felt the need to know more about “disease by the passive smoking” and “aid agency to the person who wants to stop smoking”. On the other hand, there are few students who were not interested in no-smoking project. Therefore, the no-smoking project team of the university should make an effort to enlighten them and to provide information about supporting no-smoking.